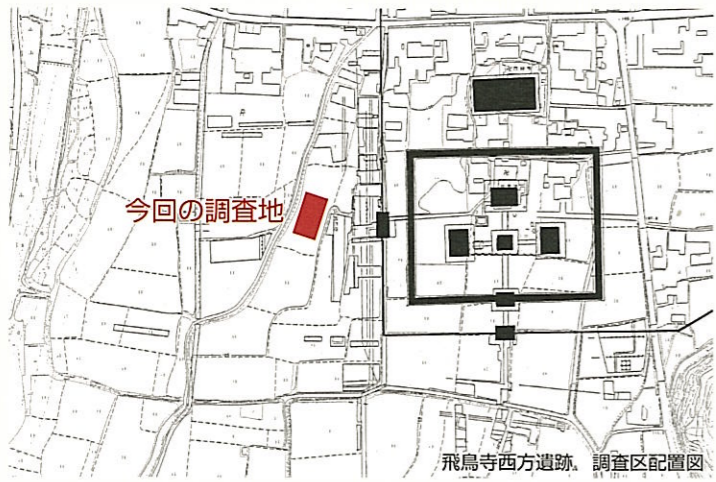
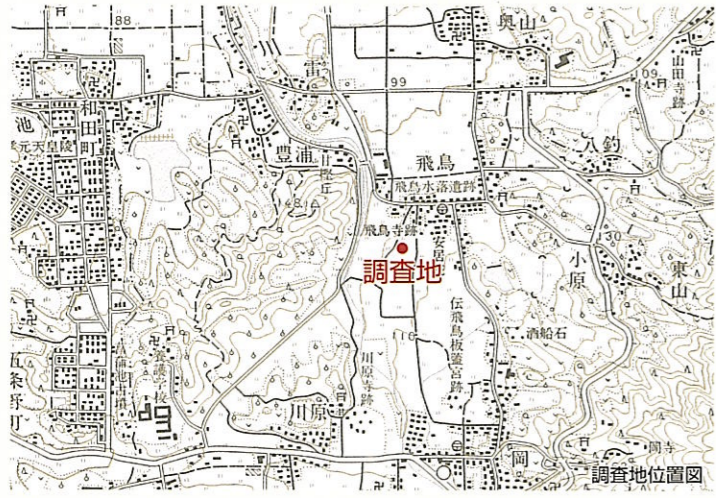


# 飛鳥寺西方遺跡



2013年2月

明日香村教育委員会



あ す か で ら せい ほ う い せ き  
飛鳥寺西方遺跡

### 1.はじめに

今回の調査は、飛鳥寺西方に広がる遺跡の性格や規模を明らかにすることを目的とした範囲確認調査です。調査地は、「入鹿の首塚」のすぐ西側、飛鳥寺西門跡から西に約40mの位置にあたります。調査面積は、約370㎡です。

この飛鳥寺西方地域は、『日本書紀』において「飛鳥寺西槻」としてたびたび登場します。斉明天皇の時代には、飛鳥寺西に須弥山の像を置いたと記されます。その後、壬申の乱の時には飛鳥寺西の槻の樹の下で飛鳥を守るための軍営が置かれたとあります。天武・持統天皇の時代になると、蝦夷や隼人、都貨羅人といった当時の飛鳥からみて辺境の人々を飛鳥寺西槻の下に大勢招いて饗宴を催した場所としても描かれており、そこで位階を授けるなどの服属儀礼が行われたようです。これらの記事から、飛鳥寺の西には槻の樹があり、大勢の人が集まることのできる‘槻樹の広場’があったと考えられています。飛鳥寺西にひろがる飛鳥寺西方遺跡は、この‘槻樹の広場’の候補地のひとつであると考えられています。

飛鳥寺西方遺跡では、これまでの発掘調査で、土器や瓦が出土し、掘立柱塀や土管暗渠、石組大溝、石組小溝、敷石遺構、砂利敷などが確認されています。砂利や礫を広範囲にわたって地面に敷き、場所によっては塀や溝で区画されていたこともわかってきました。調査地周辺では、いまだ住居跡や建物跡が確認されておらず、石敷を施した空間が広がっていたと考えられています。

### 2.検出遺構

今回の調査では、石敷、砂利敷、土坑を検出しました。

石敷は、拳大の石を敷き詰めたもので、縁辺が曲線と直線をなし平面形は不整形です。石敷の南辺は直線をなして途切れます。この石敷のほぼ中央には径約2mにわたって石が抜き取られています。この抜き取りの中央には規模が約1.5m、深さ40cmの穴が掘られていました。

この石敷の周囲全体には小石や砂利を敷き詰めた砂利敷が施されています。調査区の西側は残りがよく、密に敷き詰められていることがわかります。これら石敷と砂利敷は、その下の整地層から出土した土器や瓦から、時期は7世紀中頃以降に位置付けられます。その後は、土地の開墾や開発によって、部分的に石が抜き取られ、石敷が欠落している部分もありますが、大きな改変を受けることなく遺跡が埋まっていくことがわかりました。

このほか、調査区の東側、「入鹿の首塚」の近くでは円形とみられる径約3mの大きい土坑を検出しました。掘削された年代は特定できませんでしたが、砂利敷と同時かそれ以降に掘られたもので、最終的に平安時代以降に埋まったとみられます。

### 3.まとめ

今回の調査は、飛鳥寺西門の門前にあたり、広範囲に石敷や砂利敷を施していることが明らかとなりました。これら石敷きは拳大の石や小石、砂利などの大きさの異なる石を場所によって敷き分けられているのが特徴です。今回の調査では、飛鳥時代の石敷きが良好な姿で残っていましたが、槻樹の痕跡は確認できず、まさに‘槻樹の広場’である確証は得られませんでした。しかし、槻樹の広場に相当する石敷きを確認できたことは、槻樹の広場を解明するうえで重要な成果となるでしょう。